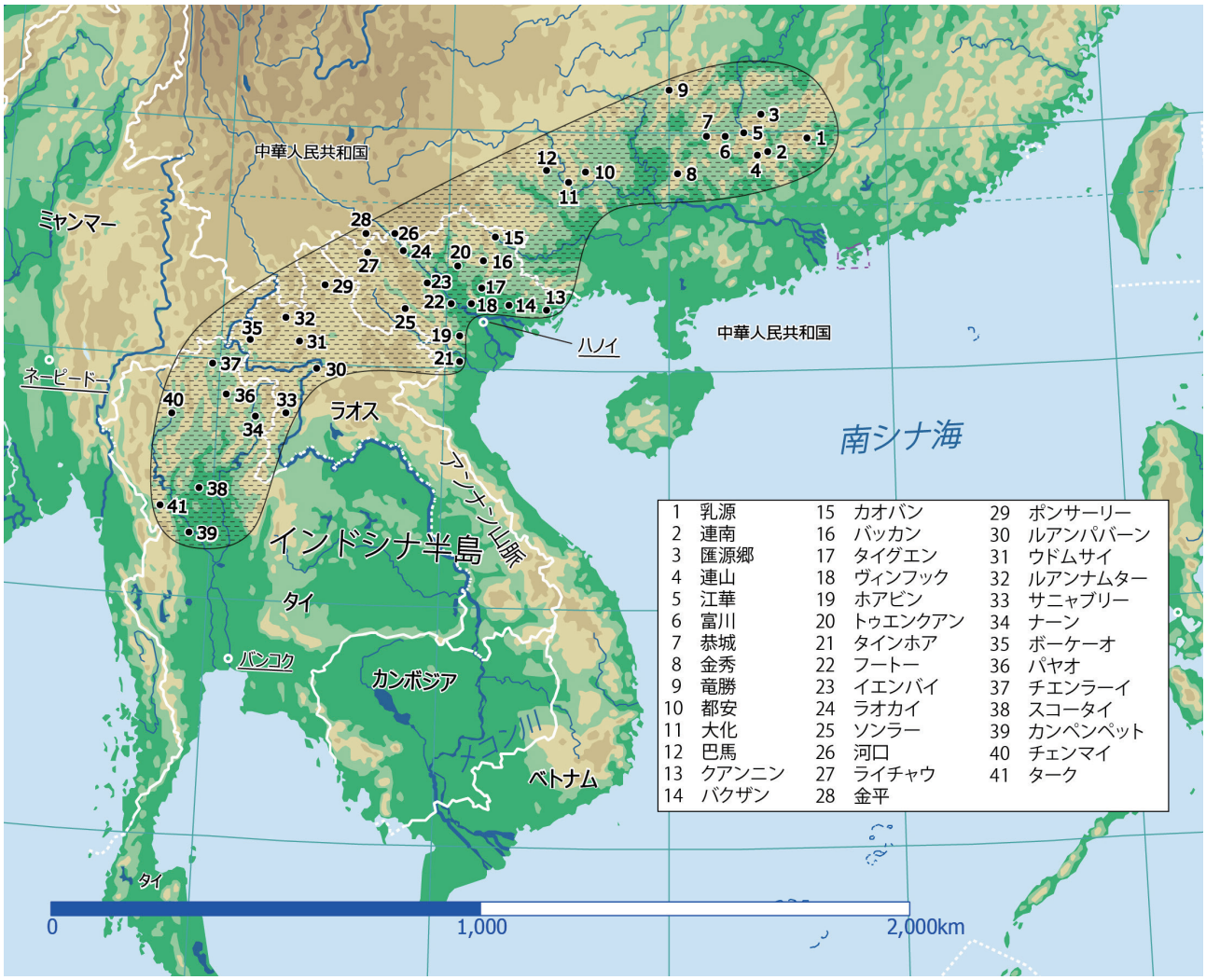
越境した民族（ミエン・ヤオ）の文化資源の継承への協働展資料

Institute for the Study of Yao Culture


中華人民共和国
ミャンマー
ネーピードー
ハノイ
中華人民共和国
南シナ海
ラオス
アンナン山脈
インドシナ半島
タイ
バンコク
カンボジア
メコン川
ベトナム
タイ
1 乳源
2 連南
3 匯源郷
4 連山
5 江華
6 富川
7 恭城
8 金秀
9 竜勝
10 都安
11 大化
12 巴馬
13 クアンニン
14 バクザン
15 カオバン
16 バッカン
17 タイグエン
18 ヴィンフック
19 ホアビン
20 トゥエンクアン
21 タインホア
22 フートー
23 イエンバイ
24 ラオカイ
25 ソンラー
26 河口
27 ライチャウ
28 金平
29 ポンサーリー
30 ルアンパバーン
31 ウドムサイ
32 ルアンナムター
33 サニャブリー
34 ナーン
35 ボーケーオ
36 パヤオ
37 チエンラーイ
38 スコータイ
39 カンペンペット
40 チェンマイ
41 タ ーク
0
1,000
2,000km

越境した民族（ミエン・ヤオ）の
文化資源の継承への協働展資料

一般社団法人 ヤオ族文化研究所
(Institute for the Study of Yao Culture)

ごあいさつ

ミエン・ヤオ族の人びとは、北は彼らの中心的な分布地である中国南部から、南はインドシナ半島の国々（タイ、ベトナム、ラオス）にかけて、東南アジア大陸部に広く分布する少数民族のひとつです。タイには 19 世紀以降に移住してきたと考えられています。タイにおいて、ミエン・ヤオ族の人びとは、カレン族やモン（Hmong）族などとともに山地民（チャオカオ Chao Khao）と呼ばれ、北部の山間地域において、祖先祭祀をはじめとするさまざまな儀礼を行い、焼畑により陸稲などを栽培してきた人びとです。

21 世になり、ミエン･ヤオ族の人びとの暮らしは、かつての暮らしとは大きく変化しています。例えば、タイ北部で焼畑が行われることは少なくなりましたし、ミエン・ヤオ族の人びとも一般のタイ人と同じように、国外では韓国や台湾、国内ではバンコク周辺を中心に全国の都市部などに出かけ、さまざまな仕事に従事するようになっています。このようにヤオ族の暮らしが大きく変化するなかで、彼らの文化の多様性を確認すると同時に、歴史的に振り返ってみることはとても大切なことになっているといえます。また、タイ人のなかでも、例えば、今回展示会を開催する首都バンコクで暮らす人びとにとって、ミエン・ヤオ族の人びとは一般に見かけることのない人びとだと思われます。もっといえば、ミエン・ヤオ族がどういう人びとなのか全く知らないタイ人の方々も多いはずです。

本展示会では、ベトナム、タイ、中国に暮らすミエン・ヤオ族の人びとが使用してきた儀礼文書や神画、彼らが行う儀礼をビデオなどを用いて紹介します。さらに彼らの暮らしや民俗衣装についても実物や写真を利用して紹介します。

本展示会を通じて、ミエン・ヤオ族の方々そしてミエン・ヤオ族の研究者だけでなく、チュラーロンコーン大学の学生の方々をはじめ大学関係者の方々、バンコク在住の日本人の方々など、これまでミエン・ヤオ族に関心を持たれていなかったたくさんの方々に、ミエン・ヤオ族の文化について、関心をよせていただければ幸いです。

最後になりましたが、現地での儀礼調査および資料の収集にご協力いただいたたタイ、中国、ベトナムのミエン・ヤオ族の祭司の皆さま、タイでの展示にご協力いただきましたチュラーロンコーン大学文学部チョムナード・シティサン先生およびチュラーロンコーン大学文学部民俗学研究センターの皆さま、そして調査や展示にご協力いただいた全ての皆さま、に心より感謝申し上げます。また、本展示会は、神奈川大学共同研究奨励助成金「ヤオ族の儀礼における文献と読誦歌唱法の総合的研究」を利用して開催されました。ここに記して厚く感謝の意を表します。

2017 年（平成 29 年）9 月 10 日

チュラーロンコーン大学文学部　増野高司

目次

ごあいさつ …… 2

ミエン・ヤオ族の儀礼文献解説 …… 4

―漢字経典『盤王大歌』を例として―

神奈川大学　廣田律子

ミエン (ヤオ) の焼畑耕作……13

東京学芸大学　吉野晃

タイ山地民の衣服様式 ……17

大阪成蹂大学教授　内海涼子

中国のミエン儀礼神画 ……19

中国・広西民族大学民族学与社会学学院　譚静

ミエン・ヤオ族の儀礼文献解説

―漢字経典『盤王大歌』を例として―

神奈川大学　廣田律子

これまでミエン・ヤオ族が伝承する漢字で書かれた経典（文献）の全容を知るために、タイ・中国・ベトナムの現役祭司の所有する文献はもちろんのこと、文献を所蔵する日本南山大学人類学博物館、ドイツ バイエルン州立図書館、イギリス オックスフォード大学ボードリアン図書館において文献調査を行ってきた。

ヤオ族の文献は、通過儀礼に関する写本、儀礼の式次第を記した写本、儀礼に用いる文書類の凡例を収めた写本、神々を崇拝する神歌に関する写本、神々の呪文に関する写本、符・罡歩・手訣を解説する写本、吉日を選ぶ暦や占いに関する写本、祭ｓ司として守るべき教訓や祭司の受礼状況を記した写本のほか、先祖の氏名が記録された家先単や埋葬場所を記したもの等が含まれる。

これまで中国湖南省藍山県、ベトナム ラオカイ省、タイ ナーン県等で実施したミエン・ヤオ族が伝承する儀礼の調査を通じて、儀礼の実践及び儀礼で使用される文献の両面から、ミエン・ヤオ族の儀礼知識の全容を把握し、全体像を明らかにしようと取り組んできた。ミエン・ヤオ族の儀礼は、文献の読誦により進行し、文献をお手本として文書が作成されるが、遠く離れたベトナム・タイ・中国の儀礼で使用される文献の種類とその内容が、相当程度相同であることが判明してきた。文献にはミエン・ヤオ族の儀礼知識や思想が体系化して漢字で記述されているといえるが、総本山のような何らかの中心的機構があってコントロールされているわけではなく、普段は農耕に従事している兼業祭司たちのネットワークによって保持されてきた。こうした事情は、本拠地中国のみならず、タイ、ベトナムそしてアメリカに分散移住したミエン・ヤオ族のもとでも同様である。層の厚い祭司たちの存在そのものが儀礼知識と漢字経典の維持再生産を支えてきたのであるが、広く分散移住したミエン・ヤオ族の間で相同の儀礼知識が伝承されていることは驚嘆すべきことである。

儀礼の実践には欠かせない漢字文書であり、ベトナム・タイ・中国の祭司が共通して所有する漢字経典のうちミエン・ヤオ族の文化資源を代表する漢字経典といえる『盤王大歌』（『大歌書』）を取り上げる。移住は神話レベルでもミエン・ヤオ族に共通して祖先以来連綿と続けられてきたことと認識されており、漂洋過海の神話が伝承されているが、神話ではミエン・ヤオ族が移住過程で遭難の危機に際し、盤王によって救われ、その後祭祀の対象とされているとされる。この盤王にかかわる漢字経典の『盤王大歌』にはミエン･ヤオ族のアイデンティティーが象徴化されているといえる。この『盤王大歌』の複数の写本を対照してプロトタイプの再構成とバリエーションの確定作業進める必要がある。ヤオ族文化研究所に写真版で収集されている中国・タイ・ベトナムのミエン・ヤオ族の間に伝承される写本を１冊ずつ並べて示す。取り上げるのは「盤王起計」部分のみである。

漢字経典『盤王大歌』は中国藍山県では還家願儀礼の「盤王願」において、タイやベトナムでは歌堂儀礼において詠唱されるが、必ず盤王への祭祀をともなう。

「盤王願」という大儀礼名が示すように、盤王の名に集約されてはいるものの、実際には三廟聖王とも総称され、さらに連州唐王グループ、行平十二遊師グループ、福（伏）霊五婆グループ、福江盤王グループ、厨司五旗兵馬グループ、陽州宗祖家先グループとにグループ分けすることができる、ミエン・ヤオ族の祖先神の神統に属する神々が祭祀の対象とされている。神々は連州、行平、福（伏）霊、福江、厨司、陽州の地名を付して称されるが、これはミエン・ヤオ族が長年にわたっ

て移住を繰り返してきた記憶の地とそこで活躍した祖先神とが接合して理解されていることを表している。現地では三廟聖王の中でも盤王を特別と考え、救世主の盤王（ビエンフン）さらに龍犬盤瓠（盤護）とも一致すると考えている。

藍山県のミエン・ヤオの口伝の漂洋過海神話にあるように、かつてミエン・ヤオ族が海を渡り遭難した際、三廟聖王に救いを求め願を掛け、無事に上陸できたので、約束を果たす祭祀を行うようになった。神々との契約関係は現在に至っても引き継がれ、救世主盤王に象徴される祖先神は、子孫の祈願の対象であり続け、大願成就の願ほどきの祭祀が続けられてきたのである。

盤王願儀礼は、広い意味での祖先への祭祀といえる。神話叙事および歴史叙事である『盤王大歌』（いわゆる『大歌書』）を詠唱することで自民族の起源や出自にかかわる伝承を再確認し、祖先を讃え、綿々と継続されてきた祭祀契約とその履行の実践である祭祀が行われる。

中国藍山県の『盤王大歌』の詠唱される場には祭壇がしつらえられる。祭壇の供物にまで民族の漂洋過海神話が表現され、豚の頭の上に載せられた肉片は、大時化の際船の舳先で無事を祈るのに使ったハンカチを表すとされる。さらにしっぽは船の櫂、腸は接岸のロープ、肝臓は船の碇、脂肪は帆布を表すとされる。豚の上に積み重ねられた笹に包まれたちまきは帆を表す葉でくるまれているとされ、その上に挿された旗は救世主盤王の好きな 36 種の花を表すとされる。神話と歴史が歌われる儀礼空間には神話世界が表現され、自民族のアイデンティティーを五感で認識する場となる。

『盤王大歌』は韻文の経文では、7 言上下句が対をなし、7 言の 4 句をひとまとまりとして構成され、日常使用されるミエン語や漢語とは異なる音訓が付され、経文によって異なるリズムと旋律をそなえた曲節を付けて発声される。経文には対句や反復や多義の比喩表現が用いられるが、儀礼の実践では経文を文面通り読誦するだけではなく、口承と書承部分を混在させたり、掛け合い問答形式で進める等極めて難解な法則が存在する。

祭祀性の強いとされる 7 言からなる詞章は、祭祀の場において歌謡語を用いた詠唱という形態を取って表出されることで、より一層呪力が発揮されると考えられていると推測する。神の声によって、7 言の調子でミエン・ヤオ族の重要な民族知識が伝えられることに意義があるといえる。

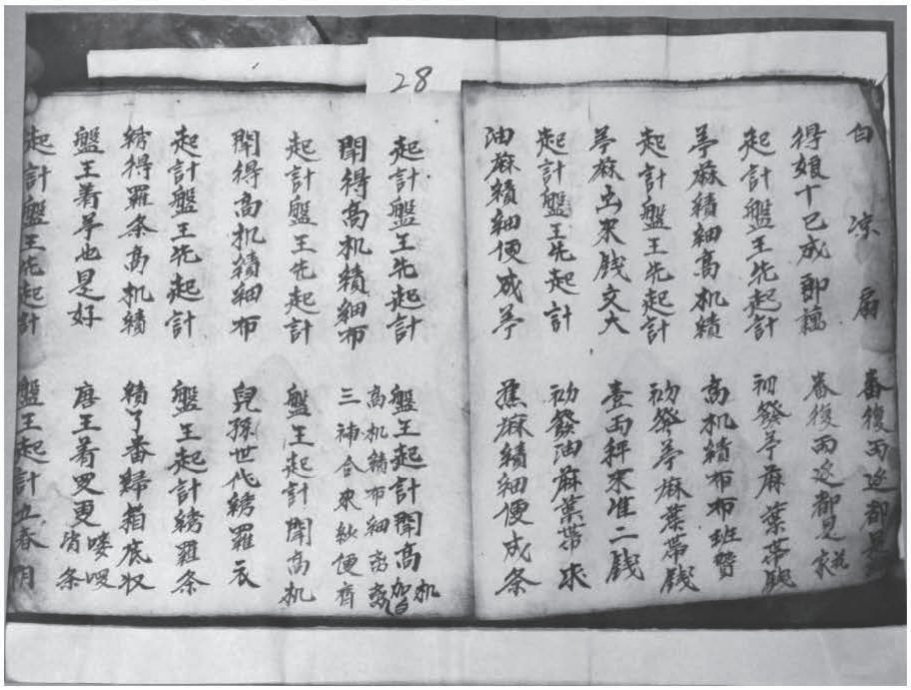
大歌の詠唱は多くの場面で問答形式を取り、謎掛けと謎解きが行われ、祖先の移住が記憶されている地から来た来訪者との遭遇が表現される。謎掛けと謎解きは極めて重要な意味をもつが、民族の知識を引き出し、民族の歴史を学習する仕掛けともなっている。さらに謎掛けにより知りたい欲求も増長され、修辞的反復繰り返しにより民族知識の定着に繋がることになる。対句と反復は儀礼において重要な意味をもつとされるが、大歌における反復は祭祀歌謡の重要な特性といえる。

文字には日常語とは異なる特別な音訓の歌謡語が付され発声される。音の記憶をベースにしてミエン語が漢字で表現されるときには音は同じでも異なる漢字が頻繁に使用されることになる。このことが、経文の読誦を複雑にしており、その上経典の経文によって異なる曲節が付されることで、さらに読誦詠唱を難解にしているといえる。

現在のところ、儀礼知識の継承は、法事の実践の中で祭司が弟子に手本を示し、弟子は五感を駆使して経文の読み方や曲節を記憶する方法がとられている。社会の変化の中で、このように弟子として修行を積んで祭司になろうとする若者は減少し、次世代への継承は危ぶまれている。

地域ごとの経典の読誦詠唱における極めて複雑な知識の解明は、今後のミエン・ヤオ族の儀礼知識の次世代への継承にも深くかかわっており、さらに解明を進めることは、ミエン・ヤオ族にとどまらない人類の文化資源としての評価につながる大きな意義をもつと考える。

祭司が盤王大歌を歌う場



白　涼　傘

得娘十已(幾)成郎耦(偶)

起計盤王先起計

苧麻績細高機績

起計盤王先起計

苧麻出來錢文大

起計盤王先起計

油麻績細變成苧

起計盤王先起計

(鬥)得高機績細布

起計盤王先起計

(鬥)得高機績細布

繡得羅條高機績

盤王着苧也是好

起計盤王先起計

番(反)復兩邊都是★/★

番(反)復兩邊都是花/家

初發苧麻葉帶錢

高機績布布班賢

初發苧麻葉帶錢

一兩秤來准二錢

初發油麻葉帶求

蕉麻績細便成條

盤王起計(鬥)高機/加

高機績布細離離/三補合來紗便齊

盤王起計鬥高機

兒孫世代繡羅衣

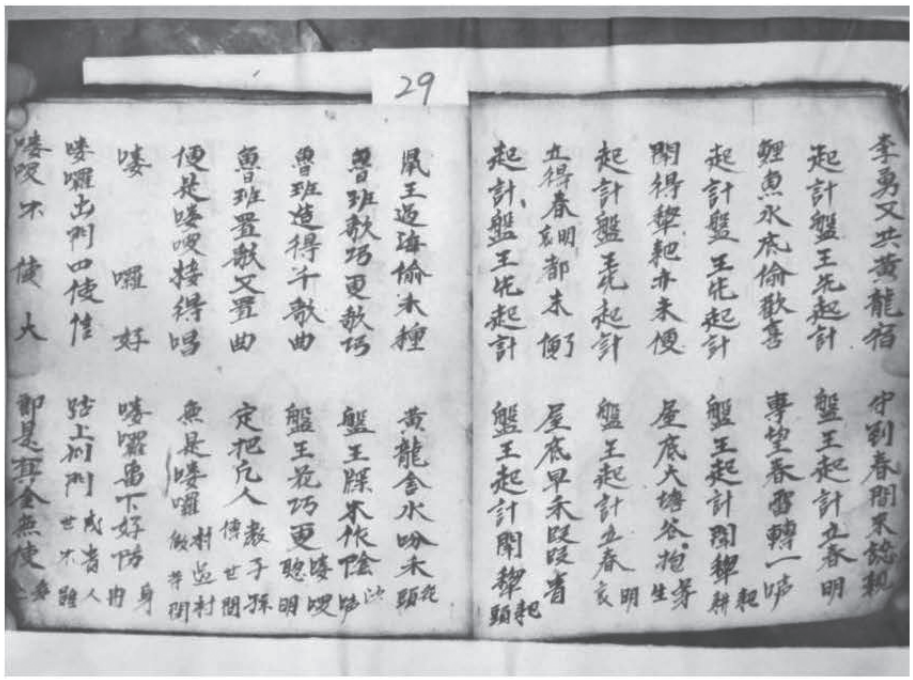
盤王起計繡羅條

績了番歸箱底收

唐王着羅更嘍囉/消(蕭)條

盤王起計立春陰

タイ文献



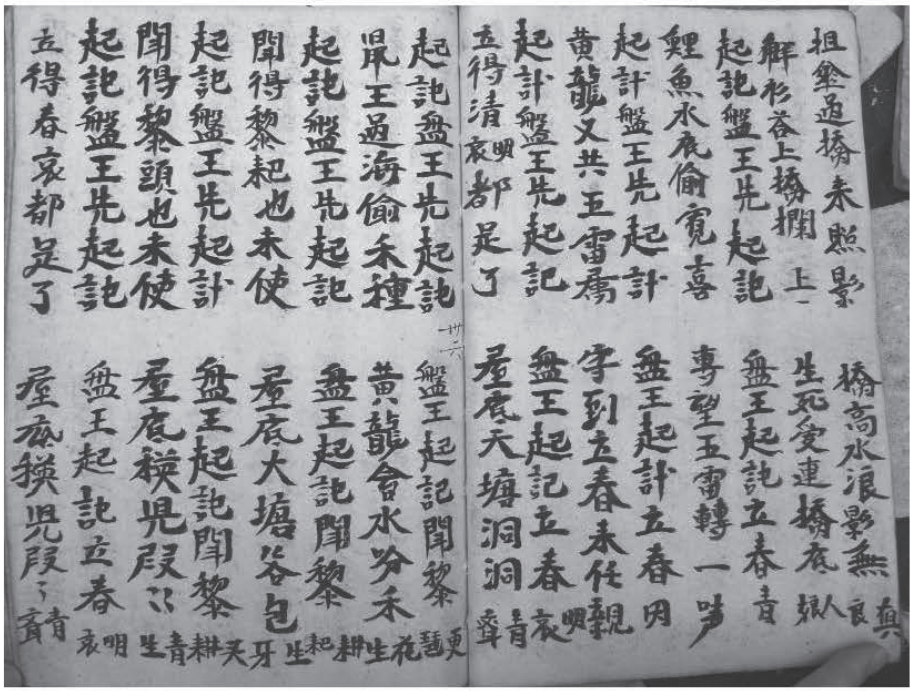
李勇又共黃龍宿
起計盤王先起計
鯉魚水底偷歡喜
起計盤王先起計
開得犂耙亦未便
起計盤王先起計
立得春明哀都未了
起計盤王先起計

守到春間來認親
盤王起計立春明
專望春雷轉一聲
盤王起計(田)型耙(耕)
屋底大塘谷抱芽(生)
盤王起計立春明(哀)
屋底早禾段段青
盤王起計(田)型耙(頭)

鼠王過海偷禾種
魯班歌巧更歌巧
魯班造得千歌曲
魯班置歌又置曲
便是嘍囉接得唱
嘍　囉　好
嘍囉出門無使信
嘍　囉　不　使　大

黃龍含水吟禾花(頭)
盤王牒木作陰沙(聲)
盤王花巧更嘍囉(聰明)
定把凡人教子孫(傳世間)
無是嘍囉村過村(做(坐)等閑)
嘍囉留下好防身(丹)
踏上州門成貴人(世不難)
郎是真金無使多(金)

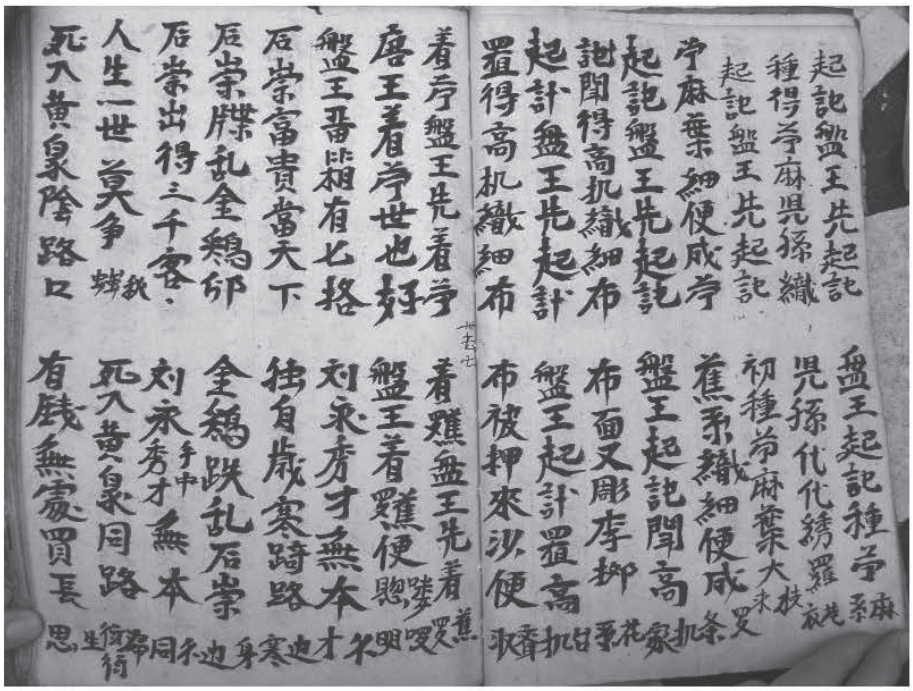
タイ文献



擔傘過橋來照影
解衫荅(搭)上橋欄上
起計盤王先起記(計)
鯉魚水底偷寬喜
起計盤王先起記(計)
黃龍又共五雷屬
起計盤王先起記(計)
立得清[明/哀]都足了
起記(計)盤王先起記(計)
鼠王過海偷禾種
起記(計)盤王先起記(計)
閑得黎耙也未使
起記(計)盤王先起記(計)
閑得黎頭也未使
起記(計)盤王先起記(計)
立得春哀都足了

橋高水浪影無真/良
生死愛連橋底人/娘
盤王起記(計)立春青
專望五雷轉一聲
盤王起記(計)立春因
守到立春來任親
盤王起記(計)立春明/哀
屋底天塘洞洞青/齊
盤王起記(計)閑黎更/琶
黃龍含水吩禾花/生
盤王起記(計)閑黎耕/耙
屋底大塘合包生/牙
盤王起記(計)閑黎頭/耕
屋底秧兒段段青/生
盤王起記(計)立春明/哀
屋底秧兒段段青/齊

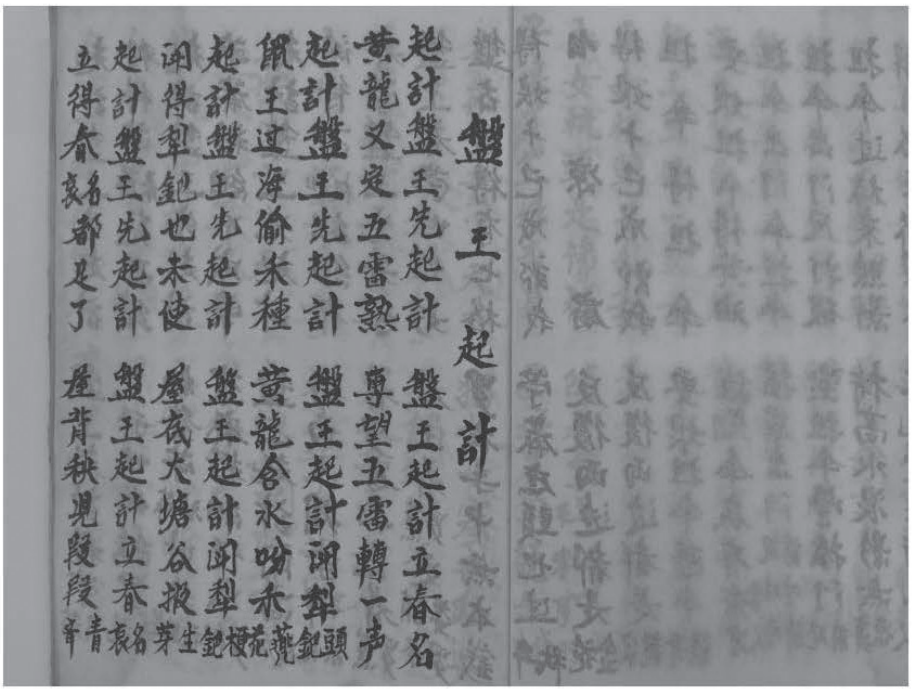
ベトナム文献



起記(計)盤王先起記(計)
種得苧麻兒孫織
起記(計)盤王先起記(計)
苧麻葉細便成苧
起記(計)盤王先起記(計)
閉得高機織細布
起計盤王先起計
置得高機織細布
着(箸)苧盤王先着苧
唐王着(箸)苧世也好
盤王留箱有七格
后(石)崇富貴當天下
后(石)崇牒亂金雞卯
后(石)崇出得三千客
人生一世莫爭秋(強)
死入黃泉陰路口

盤王起記(計)種苧麻(系)
兒孫代代繡羅花(衣)
初種苧麻葉大枝(求)
蕉系織細便成羅(條)
盤王起記(計)閉高機(家)
布面又雕李柳花(系)
盤王起計置高台(機)
布被押來沙便齊(收)
着(箸)蕉(羅)盤王先着(箸)蕉(羅)
盤王着(箸)蕉(羅)便嘍囉(聰明)
劉永秀才無本天(錢)(才)
獨自歲寒踏路邊(寒)
金雞跌亂后(石)崇身(邊)
劉永(手中)秀才無本天(錢)(同)
死入黃泉同路歸(衍)
有錢無處買長生(思)

ベトナム文献



盤王起計

起計盤王先起計
黄龍又定五雷熟
起計盤王先起計
鼠王過海偷禾種
起計盤王先起計
開得犁鈀也未(会)使
起計盤王先起計
立得春[名/哀]都足了

盤王起計立春名
專望五雷轉一聲
盤王起計開(開※科?)犁頭/鈀
黄龍含水吩(噴)禾蕎/花
盤王起計開犁梗/鈀
屋底大塘谷報生/芽
盤王起計立春名/哀
屋背秧(正)見(田)段段青/齊

中国文献

起計盤王先起計
種得苧〔麻/絲〕兒孫績
起計盤王先起計
苧麻籽細不成苧
起計盤王先起計
開得高〔加/機〕織細布
著苧盤王先著苧
盤王著苧世也好
盤古留得(倖)有(十)七(二)格(面)
石崇富貴當天下
石崇鐵煉金鷄卵
石崇接得三千客
人生一世莫爭強
石崇富貴當天下
人生一世莫爭秋
草生一世根還在
人生一世莫爭強/秋
今世有衫今世著

盤王起計種苧麻/絲
兒孫世代繡羅花/衣
初發苧〔麻/油〕葉大球/花
蕉麻籽細便成細/羅
盤王起計開高加/機
布面又凋李柳花/絲
著羅唐王先著蕉/羅
唐王著〔蕉/羅〕更請條/婁羅
羅衣(劊任)手中無本錢
獨自歲寒齊路邊
金鷄鐵煉石崇身
羅衣(劊任)手中無本才
死人黃泉共路行
有錢無路買長生
羅伏能有幾個由
人生一世斷宗由
羅伏能有幾個難/由
莫留後世把人看/收

中国文献

ミエン (ヤオ) の焼畑耕作

東京学芸大学　吉野晃

ミエンは中国南部から東南アジア大陸部に広がる山地で焼畑耕作を営みながら移住を繰り返し、タイへと至った。以下ではミエンが従来行ってきた焼畑耕作について概略を説明する。

焼畑耕作のメカニズム

焼畑耕作は、森林などの植生を伐り開いて焼くことで除去し、開いた耕地で一定期間耕作した後はその土地を放棄して (これを休閑という) 植生が復活するに任せ、他の場所に耕地をひらく農法である。いわば、耕地の切り替えを頻繁に行う農法である。たとえば陸稲の場合は、毎年異なったところに新しい畑を開く。陸稲畑の跡地はトウモロコシなど他の作物を 1 ～ 3 年栽培して休閑する。休閑した土地は、最初は草本の植物が生い茂るが、次第に陽樹が、さらには陰樹が卓越して森林化する。こうして再生した森林は、樹木によって地面の日当たりが悪くなるため、草本植物 (いわゆる雑草) の繁茂は抑制される。また落葉によって土壌が肥沃化している。そうしたところを切り開くのであるから、耕作には適している。更に切り倒した木や草を焼くことで雑草の根や種子や害虫を死滅させ、加熱により壌中の窒素・燐酸・カリウムなどの肥料素が水溶性に変化して、作物に吸収されやすい形に変わる。焼いた灰は肥料となる。大きな樹木は根が土壌中深くへ達して土壌の深いところの養分を吸い上げる。その養分が樹木の幹や枝を形成している。それを伐り、灰にして肥料として活用するのは、土壌深部の養分を利用することにもなる。また、耕地の切り替えそのものが連作障碍 (忌地) の回避策にもなる。このように、焼畑耕作は植生の遷移現象を最大限利用した農耕の方法である。また、休閑中の植生の復活によって土壌流出を抑えることができるので、斜面における農法としても適している。この場合、植生が遷移する休閑期間の長さが焼畑における収穫の善し悪しを決めるが、ミエンの言では、通常は 10 年以上休閑するのが良く、30 年以上休閑した森林を伐り開いて畑にするのが作物の出来も良く理想的であるという。少なくとも 5 年以上は休閑しなければならない。

東南アジア大陸部の焼畑耕作では、陸稲が主に耕作され、そのほかにトウモロコシ、芋類、豆類などが耕作されてきた。

タイでは、1989 年に商業的森林伐採禁止政令が施行され、一定以上の太さの樹木を伐ることが禁止されたので、1990 年以降は森林を伐り開く焼畑耕作はできなくなった。現在は常畑耕作に変わっている。中国のミエンは早くから定住化し、ベトナム、ラオスでも焼畑耕作と移住に対する抑制策が行われ、焼畑耕作に従事するミエンは減ってきている。

焼畑と移住

このように、焼畑耕作には耕地の切り替えが必然的に伴う。その意味で、人々は耕す場所を移動してゆく。しかし、焼畑耕作の方法によっては、住居の移動も伴うことがある。焼畑耕作の弱点は人口支持力が弱いことである。長期間の休閑が必要なので、ある時点で耕作している面積の数倍から十数倍の休閑地面積が必要となる。このため、陸稲焼畑をおこなっていた諸社会の民族誌データでは、人口密度は一平方キロメートルあたり 3 人～ 35 人、平均 12 人であった。村落の人口が周

囲で焼畑耕作を営む適正規模を超えると、その人口を養うためには二つの途しかない。村からより離れたところに畑を開く方法と、休閑期間を短縮する方法である。休閑期間は長いほど、先に述べた植生の遷移の効果が期待できる。逆に、休閑期間を短縮すると、十分な収量は期待できない。あまりに休閑期間が短いと、植生の遷移が十分に果たされず、森林化する前に切り開く草地焼畑になってしまい、結果として森林が消滅する。それを回避するためには、第一の方法、すなわち遠方に畑を開く方法が良いが、片道二時間以上かかるような遠い場所は、日帰りの耕作には向かない。そこで、出作り小屋を建ててそこに居住しつつ耕作することになる。これが高じると、村から離れたところに出作り小屋群ができ、それが常住村落に成長することもあったようである。一方で、既存の村落へ家族単位で移住してゆくことも行われた。ミエンの移住はそのような、①出作り小屋群が常住村落へ成長する、②既存村落へ家族単位で移住する、および③常住村落から複数家族が移住して直接に新村落を形成するといったパターンで移住を繰り返してきた。戦争などを避ける為の移住も行われ、その場合は②か③のパターンであった。ミエンは①～③のいずれかの移住を繰り返し、結果として中国南部からベトナム、ラオス、タイに及ぶ広い分布を呈するに至ったのである。タイにいるミエンは、この長距離の移住の最先端にいることになる。

焼畑耕作の農耕暦

ミエンは中国の農暦 (太陽太陰暦) に依拠して農作業を進めている。香港の永經堂やバンコクの南陽堂といった出版社から発行されている暦書あるいは日めくりのカレンダーは、ミエンの農作業や儀礼の日取りを決めるために不可欠であり、大抵のミエンの家には備わっている。ミエンは十干十二支を用いた年表記 (戊申年など) や陰暦の月表記 (閏月が入る) を用いている。日の吉凶を占うには日の十二支が重要で、焼畑の火入れなどのような出来不出来が後の成果に結びつくような重要な作業では、十二支の吉凶判断に従った日取りの決定がなされる。

以下に 1980 年代にミエンが行っていた焼畑における陸稲栽培の農耕暦を紹介する。月は陰暦月である。

十二月・正月ころから播種までの期間中	豊作祈願の予祝儀礼を各家で行う。
正月初十日ころ～	土地選定　焼畑にする土地の選定を行う。
正月～二月初め	伐木　鉈で細い木や竹を、斧で太い木を伐る。
二月下旬ころ	火入れ　割った竹を束ねたタイマツで点火する。燃えているのは小一時間である。
火入れの後	二度焼き　焼け残った木の幹や枝などを集めて再度焼く。
四月	陸稲播種　雨季に入った四月中に播種を行うことが一般的である。2m ほどの突き棒で地面を突いて穴を開け、穴に種籾を 3 ～ 10 粒入れる。こうした播種方法を点播という。
播種から収穫までの期間中	除草　畑の雑草の茂り具合を見ながら 2 ～ 3 回行う。手持ち鍬または鉈を用いる。
立秋 (七月頃、陽暦では八月七日)	土地の精霊に紙銭を捧げて豊作を祈る儀礼を行う。
九月～十月	収穫　雨季が終わり乾季になってから収穫作業を行う。収穫作業前に土地の精霊を供養する儀礼を行う。収穫方法は鎌による根刈りではなく、穂摘みであった。穂摘み具を用い、穂の 20cm くらい下を切って摘んでゆく。稲束は積層式の高層稲架に掛けておく。

十一月	脱穀　打ち付け脱穀と棒打ち脱穀を行う。打ち付け脱穀は、稲束を石に叩きつけて脱穀する。棒打ち脱穀では、稲束を竹で編んだ簀の子の上に置き、棒で打って脱穀する。昔は足踏み脱穀も行っていた。

以上は、焼畑耕作を行っていたときの陸稲栽培の農耕暦である。現在は常畑耕作に変わり、土壌の状態も変化したため、農耕暦も技術も変化してきている。

参考文献

Hanks, L.M. 1992(1972) *Rice and Man: Agricultural Ecology in Southeast Asia*. University of Hawaii Press.

柏崎浩 1990「生活集団と人口変動」鈴木継美ほか (編)『人類生態学』東京大学出版会 .

佐々木高明 2014(1971)『新版　稲作以前』NHK 出版 .

写真 1　火入れ

写真 2　播種 (点播)

写真 3　収穫 (穂摘み)

タイ山地民の衣服様式

大阪成蹊大学教授　内海涼子

東南アジアの諸民族の衣服の様式は民族により異なり、さらに同じ民族グループでも居住地域により違いが見られる。かつては衣服を見れば民族グループや居住している地域や村が推測できた。衣服の違いには、刺繍の模様や色、頭巾の巻き方など細かな部分での違いもあるが、上半身と下半身に着用する主要な衣服の様式の違いは、民族の衣文化をより広い視野でとらえる手がかりとなり得る。

東南アジアの旧来の民族の装いのうちには、男女ともに上半身を被わないスタイルが少なからず見られたが、下半身に関してはほぼすべての地域において、成人の男女は腰回り、あるいは下腹部や股間を被う衣装を着用してきた。東南アジアの男性の下衣は、褌、腰巻き、筒状衣、袴があり、女性の下衣には、腰巻き、筒状衣、襞のある巻きスカート、袴が見られる（筒状衣は、長方形の布の両端を縫い合わせ筒状にした衣装で、腰から下を被うように着用するが、地域によっては胸や肩から着用する場合もある）。

タイの山地民の男性の下衣はほとんどが袴か褌であるが、女性の下衣はより多様である。タイでは、タイ・カダイ語族系およびモン・クメール語族系の民族グループの女性は筒状衣または腰巻きを着用してきた。チベット・ビルマ語族系民族であるカレンとアカの女性は筒状衣を着用し、同じチベット・ビルマ語族系民族であるラフやリスは20世紀には筒状衣のほかに、袴を着用する例も報告されている。モン（ミャオ）とミエン（ユーミエン／ヤオ）は、いずれもミャオ・ヤオ語族系民族グループであるが、タイのモンの女性は細かな襞を入れた巻きスカートを、ミエンの女性は袴を着用してきた。

女性の下衣について、東南アジアを広く見てみると、東南アジア島嶼部のインドネシアやフィリピンでは、1枚の長方形の織り布を腰に巻き付ける腰巻きか、腰からあるいは胸から着用する筒状衣が一般的である。同様の腰巻きや筒状衣は、東南アジア大陸部においても多くの民族が着用し、さらには東南アジア大陸部の北部から中国南西部およびインド北東部にも分布している。これらの腰巻きや筒状衣は、織りあげた布をほとんど裁断することなく衣服として着用するもので、木綿や麻など繊維素材の栽培から糸作り、機織りを各家庭で行っていた人々にとって、貴重な織物を損なわない合理的な様式であった。布は用途に応じた幅で織られるので、織り耳を裁つ必要がなく、ほつれにくく耐久性が高い。タイでも腰巻きや筒状衣が女性の下衣として多くの民族グループで着用されてきた。

ベトナムのモンの女性（ラオカイ省サパ県）

襞巻きスカートは、タイではモンの女性にのみ着用されてきた。襞巻きスカートは、東南アジアでは、大陸部の北部にのみ分布する衣装様式で、東南アジア北部から中国南部に居住するモンでは、女性のもっとも一般的な衣装様式である。中国では瑶族に分類されているが言語

的にはミエンではなく、モンに近い白褲瑤や紅瑤の女性も襞巻きスカートを着用する。さらに、中国南部に居住するビルマ･チベット語族の彝族やリス族、中国南部とベトナム北部に居住するタイ・カダイ語族系民族の布依族（ベトナムでは Bố Y）の一部や、壮族（ベトナムでは Nùng）の一部でも襞巻きスカートが着用されていた。襞巻きスカートは中国ではより多くの民族グループにおいて伝統的に着用されてきたことがわかる。

これらの民族が着用している襞巻きスカートは、近年では多くの場合、工場で熱加工でプリーツを入れた合成繊維製の布で仕立てられている。モン向けのカラフルな模様がプリントされた合繊プリーツスカートの既製品が村の市場で安価に売られているのを目にすることも珍しくない。しかし、かつては、大麻や苧麻あるいは木綿の手織り布を使用し女性たちが自ら作っていた。筒状の腰衣や袴に比べると多くの布を必要とし、襞を固定する手間もかかり、重くはあるが、刺繍や蝋けつ染めで装飾され、女性の動きにつれ華やかに広がる襞巻きスカートは女性たちにとって、自らの技を示す誇りであったに違いない。

女性の襞巻きスカート様式の衣装の歴史は古く、漢代に遡り、清朝にいたるまで漢民族の衣装として着用されていた。日本の古代、高松塚壁画の女性の衣装や、奈良、平安時代の裙や裳も襞巻きスカートの系統にある。韓民族のチマも古代以来の襞巻きスカートの様式を継承している。腰巻きや筒状衣が東南アジアに広がっている衣装様式であるのに対し、襞巻きスカートは東アジアに広がっていた衣装様式だといえる。

一方、袴はタイでは、ミエンのほか、ラフやリス一部の女性にのみ着用されてきた。東南アジアの中南部では女性の伝統的な下衣が古くから袴であるのは、スマトラ北部などでイスラーム教を受容したグループの一部だけである。ベトナムのキン族の女性もアオザイの下に袴を着用するスタイルが一般的になったのは 19 世紀以降で、以前は下衣は筒状のスカートであった。中国における袴形式の下衣は、もともとは北方騎馬民族の男性の衣服であったものが、唐代に胡服として漢民族にも取り入れられ、満州族が支配した清朝に女性の下衣として袴の着用が広まったと伝えられる。日本では、古墳時代の埴輪には袴が見られ、平安時代の宮廷女性が袴を着用していた。朝鮮半島でもチマの内衣として袴様の衣服を着用していた。

ミエンの女性の下衣は、湖南省から雲南、東南アジア北部に至るまで、確認できるかぎりでは袴形式が一般的である（ただし、例外的にベトナムのミエンのサブグループであるザオ・ティエンが襞巻きスカートを着用している）。また、中国の広西南部や雲南からベトナムやラオス北部に居住するミャオ・ヤオ語族系のヤオ語系民族グループであるキム･ムン（藍靛瑶､Dao Làn Tiẻn など）も、女性の下衣は等しく袴である。ミエンやキム・ムンの女性の袴は、清朝に漢民族の衣装の影響をうけて広まったとも推測できる。これらのグループは､300 年以上前に東南アジア方面へと拡散、移動をはじめたと考えられるので、女性の袴着用もそれ以前に普及していたのかもしれない。しかし、ミエンの儀礼文書に記された女性の下衣はスカートを意味する「裙」であり、古くにはモンと同様、襞巻きスカートのような衣装を着用していた可能性が考えられる。

ベトナムのミエンの女性（ラオカイ省サパ県）

中国のミエン儀礼神画

中国・広西民族大学民族学与社会学学院　譚静

中国のミエンについて

ヤオ族は、現在中国に居住する56の民族の中の一つである。中国では瑤族（ヨウ）、タイとラオスではヤオ（Yao）、ベトナムではザオ（Dao）と呼ばれている。「瑤族」という族称は、1950年代の初期に中国政府によって作出され、それ以前に歴史上では「徭」・「猺」に代えて同音異字の「瑤」字が採用され、美しい玉を意味する。

ヤオ族は中国湖南省から雲南省、東南アジア北部の主に山地に広く居住する中国の少数民族である。中国では、主に西南部の湖南省、広東省、広西壮族自治区、貴州省、雲南省に分布する。

中国及び東南アジア北部のミエンの分布

中国でのヤオ族の支系が非常に多い。異なる支系のヤオ族は異なるヤオ語を用いる。ヤオ語はミエン（勉）語、プヌ（布努）語、ラキャ（拉珈）語という三つの方言に分けられている。この文章で紹介する儀礼神画は、ミエン語を用い、民族自称を「ミエン」といい、ヤオ族の中において最も移動性に富む集団であるとされるミエンの持ち物である。

中国のミエンの宗教文化

中国のミエンは、三清（元始天尊・道徳天尊・霊寶天尊）・玉皇・聖主・張天師・李天師・天府・地府・陽間・水府・十殿・太尉・唐葛周三将軍・監斎などのさまざまな神を信仰し、家先（家の先祖）及び始祖の盤王を祭る。三清などの神々が神画に描かれ、儀礼の際に用いられる。神画は通常時は祭司の自宅にある祭壇の横に掛けて保管されている。中国のミエンの住宅の母屋の正面の壁の左側あるいは右側には、必ず家先を祭る家先壇を設置する。家先に対して誠意をこめて、朝飯と夕飯の前に線香や酒を供える。壁の中央は盤王を祭る場所であるが、祭壇は設置しない。始祖盤王を描かれる絵画もない。ミエンによると、盤王は彼らの心の中におり、彼らが住んでいる家は盤王の家であり、盤王は自由に出入りしているため常設の祭壇は必要ないという。

中国のミエンは、さまざまな儀礼を伝承している。病気治しのために行われる架橋儀礼や年中行事として行われる送船儀礼などがある。このような儀礼には基本的に神画を使わない。

日頃行われる儀礼のほかに「掛三灯」「還家願」「度戒」などの神画を使用する儀礼を伝承している。ミエンの男子は、家を継承する資格を獲得し、法名を代々の祖先が連記される「家先単」という家譜に加えられるために、「掛三灯」儀礼を経て法名をもらう。法名は三清（元始天尊・霊寶天尊・道徳天尊）の承認が必要である。ミエンの男子は、法名を獲得すると陰兵（あの世の将兵）の加護を受けられ、自らを守り他人を救うことができるといわれる。

こうした中国のミエンは、宗教儀礼などの信仰の面において独自のアイデンティティーを所持し続けている。彼らの伝承している儀礼に用いられる神画はミエンの宗教文化を表す絵画的な表現であるといえる。

ミエン儀礼神画とは

ミエン儀礼神画とは、ミエンの信仰の対象となる神々の描かれた平面画像の掛け軸（掛け物）のことを指す。神画は儀礼を執行する祭司によって所有され、儀礼の際にしか用いられない重要な法具の一つである。

儀礼に用いられる神画は神聖的なものであり、女性は触ってはいけない。儀礼を行う際は、女性が祭壇に掛けられている神画に近づくこともいけない。

ミエン儀礼神画の種類と名称

中国のミエンの神画のすべての種類については、いまだに明確ではない。実際に筆者が異なる中国のミエン地域から収集した神画の種類をまとめてみると、種類が非常に多く、三清（元始天尊・霊寶天尊・道徳天尊）、玉皇、聖主、四府（1 対 2 点）、張天師、李天師、雷部六将把壇師・王霊官などの 6 人の将軍あるいは元帥（1 対 2 点）、十殿、大海旛、海旛張趙二郎、総壇、太尉、唐葛周三将軍、監斎大王、大道橋梁、四府功曹（1 対 2 点）、南斗星君、北斗星君、王姥、庫官、施食等 26 種類ある。もちろんこの 26 種類の神画は 1 セットのものというわけではない。1 セットの神画の 26 種類中には、元始天尊、霊寶天尊、道徳天尊、玉皇、聖主、四府（1 対 2 点）、張天師、李天師、大海旛、十殿の 11 種類と、元帥神が描かれる神画（把壇師・王霊官・馬元帥）のいずれかの神画 2 種類が必ず入っている。この 13 種類の上で、それぞれの地域の事情及び好みにより、さらに異なる種類の神画が加えられている。よって 1 組の神画に入っている神画はおおよそ 17、18 種類ぐらいになる。

神画はセット単位として所有及び使用される。中国の湖南省永州市藍山県及び広西壮族自治区東部地域のミエン祭司によると、神画は「行師」と「三清兵馬」という二つのセットに分けられている。「三清兵馬」は「行師」より等級が高い神画のセットである。「行師」はまた「行司」とも書かれ、太尉、海旛張趙二郎、唐葛周三将軍、総壇の 4 種類の神画のことを指している。「三清兵馬」は、三清である元始天尊、霊寶天尊、道徳天尊の 3 種類の神画を含む他の十数種類の神画のことを指す。

丹青匠人：儀礼神画を描く者

中国のミエン儀礼神画を描く者は丹青匠人と呼ばれる。丹青匠人は誰でもなれるものではない。丹青匠人になりたい者は、少なくとも「掛三灯」儀礼を経過しなければならない。「掛三灯」儀礼を経て法名をもらい、これは丹青匠人になる最低限の要求である。

丹青匠人は性別問わず、ミエンの女性も丹青匠人になることができる。女性が丹青匠人になりたい場合は、その女性の旦那が「掛三灯」儀礼を経過さえすれば、妻の方は丹青になることが可能だ。しかし、中国では男性の丹青匠人も極めて珍しく、女性はなおさら少ない。

数年間を掛け、2016 年夏に筆者はやっと広西壮族自治区賀州市沙田鎮でミエン儀礼神画の丹青匠人黄氏を見つけた。黄氏はミエンであり、今年（2017 年）で 74 歳になる。黄氏は丹青匠人であるが、大祭司でもある。黄氏は 1964 年正月に「掛三灯」儀礼を経て法名を得た。同年 12 月に「掛七星灯」儀礼を経過し、1967 年 11 月に丹青匠人になる儀礼を経過し、1979 年 10 月に「度戒」儀礼を経過し、1980 年に「加職」儀礼を経過して「黄財一郎」という郎号を得た。

黄氏によると、彼は小さい頃から絵を描くことが大好きで、13 歳の時に独学で儀礼神画を描くことを学んだ。丹青になる前に黄氏はすでに「掛三灯」と「掛七星灯」儀礼を済ませた。1967 年に、黄氏は知り合いの紹介で、1 羽の雄鶏を持ち、当時現地で有名な丹青匠人の家へ訪ね、拝師儀礼を行い、師弟関係を結んだ。拝師儀礼を通じ、黄氏は丹青匠人になる「點相師父名単書」という証明

書を得た。黄氏によると、このような証明書を持っていなければ、本物のミエン儀礼神画丹青匠人とはいえず、もちろん描かれた神画も儀礼に使えないといった。

広西壮族自治区賀州市沙田鎮ミエン儀礼神画丹青匠人の黄氏

儀礼神画の所持及び使用の資格

儀礼神画は誰でも使えるものではない。祭司は神画の所持及び使用の資格を持っていなければ、神画を持つこと及び使用することができない。

ミエンにおける儀礼神画とは、祭司がどの程度のレベルで、どういった儀礼を行うことができるのかという能力の証を示す重要な法具として所有され、儀礼に用いられる。

中国では、ミエンの祭司は「掛三灯」儀礼を経れば、「三灯」を掛け、祭司となる法名を得、「下壇兵馬」と称する兵を授けられ、「行師」神画（太尉・唐葛周三将軍・海潘張趙二郎・総壇）を所有する資格を得ることができる。そうすると、祭司は「行師」神画を所持でき、儀礼の際にこのセットの神画を使用することもできる。

「度戒」儀礼を通過すれば、「十二盞大羅明月灯」を掛け、最高レベルの呪法を伝授され、「上壇兵馬」と称するさらなる多くの兵を授けられ、祭司としての最高位を得、「三清兵馬」神画（元始天尊・霊寶天尊・道徳天尊・玉皇・聖主・天府・地府・張天師・李天師・趙元帥・王霊官・大海潘・十殿など）を所有する資格を得ることができる。そうすると、「三清兵馬」神画を所持でき、儀礼の際にこのセットの神画を使用することもできる。

儀礼神画に描かれる神々（GXH-A-1 ～ GXH-A-14）

ここで紹介する 14 種類の神画は前述した中国広西壮族自治区賀州市沙田鎮の丹青匠人の黄氏が描いた神画である。これらの神画資料は筆者が 2016 年 8 月に黄氏の家で調査する際に撮影したものである。黄氏は「行師」と「三清兵馬」神画を両方持っている大祭司である。ここで紹介する 14 種類の神画は黄氏が所持する神画の中の一部である。

GXH-A-1 玉清

玉清神画に描かれているのは道教中の最高神の元始天尊である。

天尊は三清境の玉清境を支配する主神である。

GXH-A-2 上清

上清神画に描かれているのは、如意を持つ霊寶天尊である。霊寶天尊は道教において最高の天上界、三清境の上清境の弥羅宮に住むことから上清（天尊）の呼び名がある。

GXH-A-3 太清

太清神画に描かれているのは、団扇を持つ道徳天尊である。道徳天尊は道教の神である。三清の天界のうち、太清境に住まって、玉清境に住まう元始天尊、上清境に住まう霊寶天尊と共に、道教三尊と称する。

GXH-A-4 玉皇

玉皇は宋代以降の中国民間諸神中の最高神である。玉皇大帝・玉皇上帝・昊天玉皇・玉帝などとも称される。天界の支配者であり、その下の地上・地底に住むあらゆるものの支配者でもある。

GXH-A-5 星主

星主は聖主・聖旨とも称される。一般的に言えば、ミエンの儀礼神画に描かれている星主は、玉皇のように頭に帝王を象徴する冕を被り、龍袍を着る。

GXH-A-6 張天師

張天師、正一教の教主一般的な呼称である。正一教では五斗米道を唱えた張陵を始祖とし、張陵を天師と称した事から教主を天師、教団を天師道と称し、教主は張陵の子孫に世襲された。ミエ ンが信仰する張天師は諸々の法ができる法力が高い者であり、また法の伝授者でもある。

GXH-A-7 李天師

李天師神画と張天師神画は対となるも のである。通常李天師は向かって右を向き、張天師は向かって左を向くと描かれる。李天師は法を教える師である。

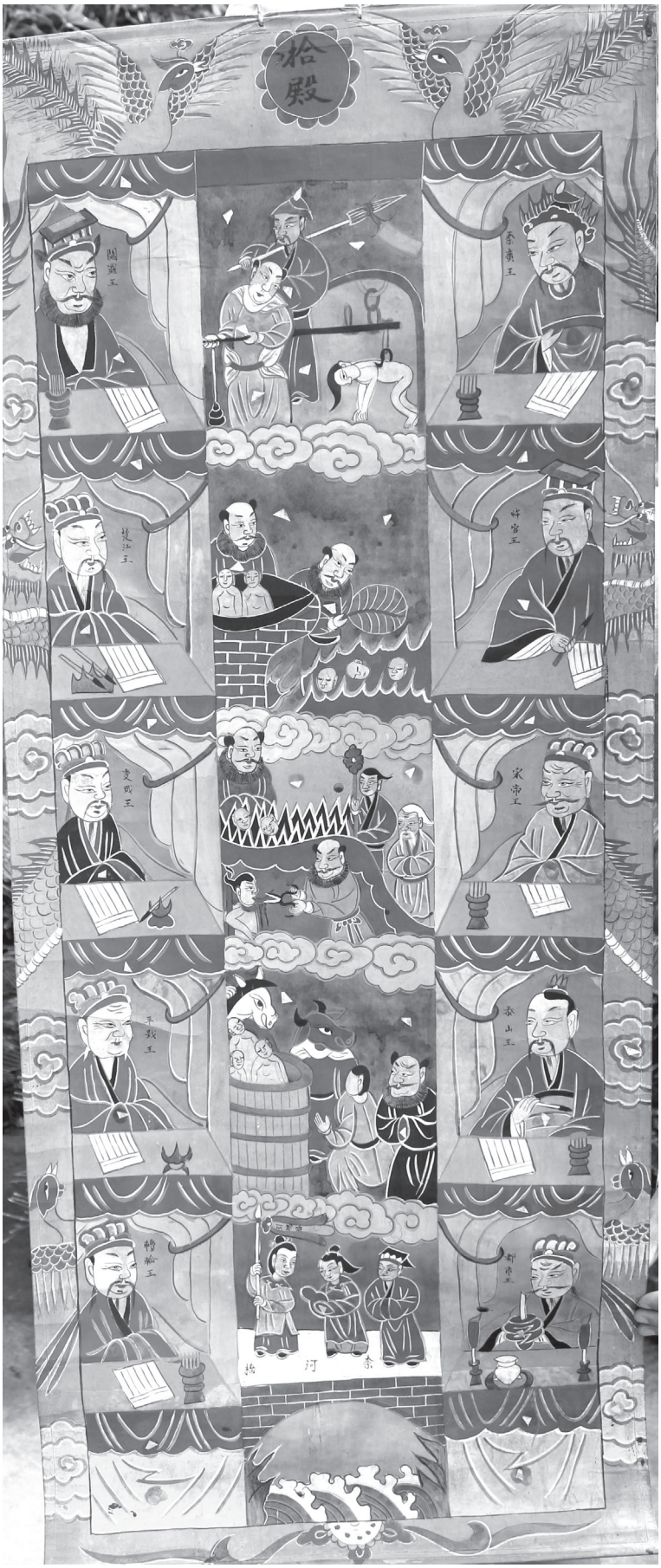
GXH-A-8 天府

ミエンの儀礼神画の中で、四府（天府・地府・水府・陽間）が描かれている対となる２点の神画がある。１点の神画にはそれぞれ二神が描かれ、合わせて四神が描かれる。

GXH-A-9 地府

GXH-A-10 太尉

太尉は、法を伝授する祖師であり、兵を統率し、邪師を処罰できる位が高い武将神である。神画に描かれている太尉は、剣を持ち、威風凛々である。



GXH-A-11 十殿

拾殿神画には奈何橋・孟婆・牛頭・馬頭・10 人の王及び幾つかの地獄の風景が描かれている。十王とは冥界にあって亡者の罪業の処断を司る 10 人の王、すなわち秦広王･初江王･宋帝王・五官王・閻魔王・変成王・太山王・平等王・都市王・五道転輪王を指す。

GXH-A-12 鄧元帥

ミエンの儀礼神画に描かれている康元 帥・辛元帥・鄧元帥・馬元帥・関元帥などの元帥は、雷部に属し、邪鬼を滅ぼし、祭壇を守備する役目を持つ勇猛な武将神である。

GXH-A-13 辛元帥

GXH-A-14 海旛

海旛は法を伝授する師である。神画に描かれている海旛は、紅色の衣あるいは鎧を着、酒杯と剣を持ち、龍に乗る。「度戒」儀礼の「上刀梯」儀礼の際に、海旛神画は刀梯（刀の梯子）の左右の 柱に掛けられて使用することが見られる。それだけではなく、神画にも刀梯を登る場面が描かれている。

おわりに

この文章では、主に中国のミエンの伝承している儀礼神画とは何か、その種類と名称、神画を描く者である丹青匠人、神画の所持及び使用の資格、また神画に描かれる神々について簡単に紹介した。儀礼の際にどのように神画を使用するのか、また神画に描かれる神々の容貌や服飾などがミエンの儀礼文献の中でどのように記述されているのかについては本文章では紹介していない。立体的にミエンの儀礼神画を研究するのならば、やはり今回紹介した内容だけでは足りない。儀礼神画、儀礼文献及び儀礼実践を合わせて多角度から神画を考察しなければならない。さらに、国境を越えて異なるミエン地域の神画との比較を行われなければならない。これは長期的な仕事で努力が必要だ。本文章の紹介を通じ、中国のミエン儀礼神画に関する基本的な知識とミエンの伝統文化の豊かさを多くの方々に理解していただきたいと考える。

越境した民族（ミエン・ヤオ）の文化資源の継承への協働展資料

Copyright © 2017 by Institute for the Study of Yao Culture
All rights reserved.

本展示会は、神奈川大学共同研究奨励助成金「ヤオ族の儀礼における文献と読誦歌唱法の総合的研究」を利用して開催されました。ここに記して厚く感謝の意を表します。

一般社団法人 ヤオ族文化研究所
〒 253-0023
神奈川県茅ヶ崎市美住町 14-21-302
Tel. 050-3786-9310
WebSite http://www.yaoken.org/ E-mail office@yaoken.org